

ブーゲンビル戦と沖縄

大西 正幸

■ 参加者

ジェイムズ・タニス：パプアニューギニアのブーゲンビル自治州前大統領。内戦の終結に貢献する。現在は、目前に控えたブーゲンビルの独立に向けて、戦後の復興、和解、農村レベルの行政組織の整備等に当たっている。大西 FS のコアメンバー。

玉城 深福：沖縄県国頭郡大宜味村田嘉里在。1942-45 年にブーゲンビル戦に参加。

大西 正幸：FS「アジア・太平洋における生物文化多様性の探究」責任者。

島田 隆久：国頭郡国頭村奥区の区長を二期務め、指導者として奥区の発展に貢献。特に、奥の字立「民具資料館」の設立、『奥共同店創立百周年記念誌』の編集など、奥の文化事業の中心的存在。大西 FS のコアメンバー。

宮城 邦昌：在那覇奥郷友会会長。大西 FS のコアメンバー。

Y さん：玉城 深福さんの友人。お兄さんをブーゲンビル戦で亡くしている。

M さん：玉城 深福さんの長女。

■ 背景

タニス・大西は、FS 関連で沖縄行きを企画、2014 年 10 月 3 日に琉球大学で、ブーゲンビルのアイデンティティをテーマにしたワークショップを行い、10 月 4 日から沖縄北部の調査地、国頭郡国頭村奥に視察に入る予定であった。この出張の直前になって、大宜味村在の辺土名高校の高校生による玉城深福さんのブーゲンビル戦の体験に関するインタビュー記事が、「琉球新報」に二回連載（9 月 13 日・14 日）で掲載された。この記事を読んだ大西の企画に基づき、FS コアメンバーの島田・宮城さんを介して、10 月 4 日にタニスさんと玉城さんの対談が実現する運びとなった。

10 月 4 日、タニス・大西・島田・宮城は、午前中、摩文仁の丘のブーゲンビル慰霊碑を訪問、そして夕方から夜にかけて、大宜味村田嘉里の玉城さん宅を訪問した。玉城さんは我々の訪問を待ちかねて、家の外に出て待っていてくださった。

対談には、玉城さんほか、その長男、長女、友人の Y さんなど、他にも何人かの参加者があった。下の記事は、実際の対談のうち重要な部分を抜き出して編集したものである。玉城さんのブーゲンビル戦の体験談と、タニスさんのお父さん・お祖父さんやブーゲンビル現地の人から聞いた話とが交錯する。最後には、このお二人と Y 氏の間で、草の根レベルの和解プロセスの始まりが誓われる。

■ 対話の記録

サゴヤシと芭蕉布の話

タニス：I am very pleased to come and meet you.

玉 城：向こうで 4 カ年、勤務してました。いろんな戦争に参加しましたが・・・ブーゲンビルの方に、迷惑かけたことがありましたが・・・こんな大きなヤシの木なんかを倒して、その中身を、中の芯を取って食べたんです。そのヤシというのは、50 カ年じゃないと取れない、収穫できないと言う・・・

大 西：そうですか。

玉 城：非常に大事なものですが、もう、日本人が片っ端からやったもんですから、今考えるともう、もう

非常に悪いことをしたなと思っております。

大 西：He said when he was there, they cut lots of big sago trees.

タニス：Yes.

大 西：For survival.

タニス：Yes.

大 西：And so now he thinks it was a very bad thing, for local people might have been affected by that.

タニス：Hmm.

大 西：So he apologizes for that.

タニス：Yes, I accept the apology on behalf of the people. And on Bougainville people no longer think about the war.

The war to Bougainvillians was foreign, it was not direct, people don't feel Japanese for directly attacking the people. No.

大 西：もう過去のことですし、それからブーゲンビルの人たちは、日本人がブーゲンビルの人たちに悪いことをしたとは思ってなくて、それはブーゲンビルで、要するに日本とアメリカ、あるいはオーストラリアが戦ったのに巻き込まれたということはあるかもしれませんが、日本人がブーゲンビルの人たちに対して、なんていうんですか、悪いことをしたという風にはもう今は考えていませんということです。

玉 城：そうですか。

大 西：むしろ日本の人びとからいろいろ、その頃、いろんなことを学んだっていうか。たとえば、なんか芭蕉布の作り方も教わったようですね。

玉 城：はい。はい。これは私の戦友がやっていました。

大 西：そうですか。

大 西：Actually his friend taught how to make clothes.

タニス：(笑) Yes, our grandfather-

玉 城：その戦友は亡くなりました。

大 西：それを、実はタニスさんは、おじいさんから習って、それで何か作り方が足りなかったから、今度は芭蕉布会館に行って、もう一度作り方を教わりたいということをおっしゃっているんですよ。

玉 城：はあ、私の戦友でした。

大 西：そうですか。

玉 城：なんか最初のハタムンといいますか、あれから全部、その人がやって。Mと言いましたよ。中頭(なかがみ)出身の方でしたよ…そう、それを2カ月か3カ月ぐらいかかかって成功したんですが、あそこにはこの、大きな芭蕉がいくらかありましたもんですから、そんで成功しまして。その人は師団から表彰されました。

大 西：機織り機をつくって、そいで、もうその場で教えていたということですか。

玉 城：いや。まあ、そのとき、織り機を成功してやるところまでは、私は、あの、それは兵隊がやっとなのをだけ、見ておりましたよ。それから私なんか戦闘に出たもんで、それ以降は見えていません。残念ですけど。もう名前は、Mという名前だけは覚えておりますが、下の何と言うのは忘れております。

大 西：One of his friends actually tried to make weaving what machine —

タニス：Machine?

大 西：Using fibers to make clothes.

タニス：Yes.

大 西：And he taught …

タニス：Yes.

大 西：local people.

タニス：Yes. Our people were very surprised. In fact my grandfather said, when the Japanese arrived, they saw a very quick difference. Australians and Americans, they were Allies, they did things and just gave them, and they didn't show them how to do it. When Japanese came, they showed them how to make cloth and salt, so that's why — in fact the local people were very friendly to the Japanese because they showed them how to make things.

大 西：アメリカ人とかオーストラリア人が島に来た時は、物はくれるんだけど、それをどう作るかということはいっさい教えてくれないとおっしゃっています。

玉 城：そうですね。

大 西：でも日本人の兵士は、なんかくれると、それをどう作るということまで教えてくれたというのが、友好関係を結んだ一番大きな原因だそうです。

玉 城：ああ、そうですね。

タニス：And I know this story because my grandfather was a medical officer, he was shot in Sovele, wounded here, so he used to tell us the story that in one way Japanese, they saw Japanese as more generous. White people were hiding the secret, they said. The Japanese were showing them the secret of making cloth.

大 西：ですからその態度というか、なんか、その、アメリカとかオーストラリアの人は何か隠しているみたいな印象をいつも村の人たちは持っていて、日本人はもうすべて教えてくれるという、その違いがすごく大きくて、友好関係を結んだ村が多かった、という風に言っていますね。

タニス：So in terms of the impact of the war, the people of Bougainville do not hate the Japanese. No. In fact, I came here to see you, so that if it is possible, we can also have a reconciliation with some families, and reconcile, make peace and move on. And in fact, I'm very happy to see you, so happy to see you. I find peace when I see you.

大 西：あのう、ですから、ブーゲンビルの人たちはもう日本兵に対する憎しみとかそういうのはいっさい持っていない、ということがまず第一で、そして、今回来たのは、こういう非常に個人的なレベルとか家族の方々と一緒に話し合っ、お互いに和解するということをぜひしたかったので、今回お会いできてとてもうれしいです、ということでした。

玉 城：そうですね。

タニス：And I'm happy because I have the opportunity to come and see you while you are still alive, so that I talk to you and give you peace, the past has gone, we must now live in peace.

大 西：深福さんのように生きている方に会えて本当にうれしいです。このことをお伝えすることができて。もう過去のことは忘れて、これから新しい平和な関係を築いていきたいと思います、ということです。

玉 城：自分たちのやったことは、もう今考えると、本当に悪いことしたなあと思ったりします。いや、それはあの太いやシ、あんなかがなかったらもう日本人は一人残らず餓死して、なんか、皆、天国に行っったんじゃないかと思われまますよ。

大 西：He is again talking about sago he cut down —

タニス：Yes, my grandfather said the Japanese, they were cutting down sago, and eating the top bit that the local people don't eat, the young bit, that's where the — some mistrust started,

大 西：Yeah.

タニス：Because they were cut off from food, so sago, the top bit.

大 西：But they were desperate for survival, that's why they did.

タニス：Yes.

大 西：and he's apologizing for that.

玉 城：今でもこの大きなヤシはありますか？

大 西：Do you have still these big sago palms?

タニス：Yes.

大 西：はい、あります。

玉 城：ああ、50 年たたないとその中身は食べないという話は聞いていました。

タニス：Yes, my grandfather used to say that they cut down sago.

大 西：あのう、ええと、おじいさんが、その、日本兵が大きなサゴヤシを切ったという話を、彼は聞いていたそうです。

玉 城：ああ、そうですか。私は 3 本は切りましたよ。

大 西：He cut three.

(笑い)

玉 城：いや、本当の話、3 本。私は一人じゃないから・・・

タニス：But those were not the last sago, too many sagos on Bougainville.

大 西：たくさんヤシはありますから大丈夫です、とおっしゃっています。

タニス：You did it for survival.

玉 城：友達と組んで、3 本取ったんですが、私一人ではどうてい取れるヤシじゃなかったんです。ああ、そうですか、おじいさんたちがそんなことを。ああ。

オラミ村の話

玉 城：あの方のお兄さんは [離れてすわっている Y 氏を指して]、あの、なんか、今は銅山になつとるよ
うなところ・・・

大 西：はい。はい。

玉 城：オラミというところで亡くなっているんで。

大 西：His elder brother died in Orami.

タニス：Yes. I said. My mother comes from Orami. I'm from that area.

大 西：あの、この方のお母さんが実はその、オラミ村から来たそうです。

玉 城：ああ、そうですか。

大 西：今回、来る前にオラミの方々といろいろ話をして、そのときの歴史をいろいろ。

タニス：And local people even know the names. Last week some brought — their chief showed me — he said he has a
money that the Japanese bought food from him, his father's old brother.

大 西：Money, Japanese money?

タニス：Okane.

大 西：Hmm. そのオラミ村の方も日本兵のお名前まで一人一人全部覚えているそうです。

玉 城：ああ、そうですか。

タニス：So Orami is not recorded, and people know where they threw the bones, so they're still there.

大 西：ですから、どこに誰が埋められたというのも全部、村の人たちは知っているそうです。

玉 城：ああそうですか。

大 西：そのころ日本兵からもらったお金だとかもまだちゃんと。オラミ村は最初のころ非常にいい友好関係だったのに、途中で誤解が生じて、オーストラリア人からのなんか手紙を誰かが持っていたのに
—そのことで誤解が生じて、殺し合いになってしまったという、とても不幸な。

タニス：Yes. The story I hear from the old people says that the Japanese in Orami were living peacefully with the local

people, but...

大 西：最初はオラミ村と日本人の兵士とは非常に友好的な関係で平和に暮らしていたそうですね。

タニス：but when that happened, the local people killed the Japanese. So it was the local people that killed the Japanese, so bad things happened on both sides, so I also say sorry that my people killed the Japanese.

大 西：でも、その誤解のために、オラミの村人たちが日本人の兵士を殺すということになってしまったということで、そのことに対して非常に残念で・・・

タニス：Because I am from that area, Orami area.

大 西：そのことについて、ぜひ謝りたいということです、あの、タニスさんが。

玉 城：そうですね。

タニス：But today when they retrieve bones, that area has not been recorded. From Panguna - they were patrolling from Panguna to Orami through Irang, at Orami, settling in Orami.

大 西：最初は今の鉱山になっているパングナというところがあるんですが、そこに駐屯地があって、そこからオラミに移ってきて、日本人の兵士がそこに住んでいたそうです。ですから、あの、その記録自体はあんまり残っていないそうですね。パングナのほうは残っているけど、オラミ村の話は残っていないくて。でも村の人たちはいまだにずっと語り継いでいるそうです。

玉 城：そうですね。

タニス：That is the story from the local people. We don't know, I don't know, but that's how they're telling, how I hear from older people. In fact they told me this before I came.

大 西：ですからそのときの名前まで全部覚えているそうですよ。どこに埋められたとか、そういうことも・・・

タニス：And the people in Orami are open.

玉 城：これの兄貴は[Y氏を指して]Y.E.と言います。

タニス：And the people in Orami are open; they've been approaching the government to talk to the Japanese to come and also do something in that area, meaning to retrieve the bones.

大 西：で、オラミ村の人は、ですから、ぜひ日本人の遺骨収集ということがあれば、ご案内しますので、ぜひいらしてくださいということです。

玉 城：そうですね。はいはい。私は戦地におるときから、オラミ村の話はよく聞いておりました。

大 西：Y.E. That's the elder brother of him, probably he was killed.

タニス：Yeah, yeah, all of them got killed. Nobody survived.

大 西：One of them was his brother.

タニス：Are there any names? Or there might be another from other area.

大 西：Might be from other areas, but we have to check.

タニス：Local people will know the names, the person — that's the chief of Orami now — his father was involved in the incident.

玉 城：オラミ村はやっぱり・・・

タニス：You can show them the map. So I'm also sorry that my people did not look after you.

大 西：ですから、彼の、あの、部族の人たちなので、その人たちが日本兵をちゃんと守れなかったことに対して、心から謝りたいということです。

玉 城：ああ、そうですね。はい。

行軍

大 西：地図を持ってきたんですけど、深福さんはタロキナで戦われたんですよね。

玉 城：はい。タロキナ。タロキナー地名はですな、全部もう日本人が作ったもので、山なんか、九重山

(クジュウザン) とか比叡山 (ヒエイザン) とか、日本の名前を付けておるんですよ。

大 西：ああ、そうですか。

玉 城：はい。

大 西：They gave all Japanese names, so …

タニス：To?

大 西：To local places.

タニス：(笑い) Interesting. So, I'm very happy that the story I have been telling you and I-san, it is the story that we came to connect.

大 西：これがタロキナです。

玉 城：モービアイ、ブインが・・・

大 西：ここですね。

玉 城：はい、最初上陸したの、この辺で。

大 西：こちらから上陸されたんですか。

玉 城：はい、この辺からこう。

大 西：He landed from here, from Buin.

タニス：Yes, Buin. Kangu.

玉 城：ブインで。ここは日本の飛行場もあったんですよ。

大 西：それでここからタロキナまで、ずっと歩いて戦いに行かれたんですか？

玉 城：私なんかは輜重 (しちょう) 隊といって、あのう、補給部隊でした。そんでもう、毎日、弾薬とか食料運んでですが—この九重山という山は、これ日本名ですが、その山、ここにある山に [家の外を指して]、格好が似てですな。格好が似て、その山の倍くらい、もっと高い山でしたが、そこ、弾薬なんか運んだりしてですな。この九重山という山、それを越えるのにもう大変な苦労しましたよ。

大 西：There was a very steep mountain, which they called Kuzuusan - nine - fold mountain.

玉 城：またほかに、ヨシノ山とか。

大 西：Many Japanese names to the mountains. One of the mountains looked like the one over there.

タニス：Maybe here, in Torokina.

大 西：Basically, he tried to bring things for the soldiers who were fighting near Torokina, so he had to cross over the mountains to reach there. オラミには行かれたことあるんですか。

玉 城：オラミ、行ってました。

大 西：そうですか。So he also went to Orami.

タニス：He must have also been in Waru Waru via Panguna.

大 西：日本軍、日本兵が駐屯していた場所にはだいたいあちこち行かれて、弾薬とかを運んで。

玉 城：はいはい、弾薬をなんか補給したり。

大 西：それはだから、こちらから来たものを全部持ってくるよ。

玉 城：はい、全部担いで。

大 西：He had to supply everything which was brought by ship from here to all these places.

タニス：Yes, Yes.

玉 城：そんで戦争一勝てる戦争じゃなかったですよ。食べもんはないしですね、弾薬はないし。相手は自動操縦で、ぱぱぱあんっ、とやる。日本では1発打って、ぽんと弾こめてまた1発、こんで戦争できるもの、おかしいなあ思っ。

大 西：So he felt, because they had nothing, no food, very few, sort of, ammunitions, they had to bring all these, but,

eventually he felt like — how could we win? How can we we win?

タニス：Yes, because the Allies cut off ship routes …

大 西：And they have got these machine guns and everything. The Japanese had very few bullets.

タニス：Yes, our local people say they had no bullets. So it was hard …

大 西：Yes, so it was how he felt, but he couldn't express because he was commanded to bring all these things.

タニス：Yes, the local people actually knew. Maybe in some camps, they might have had some bullets, but the supply line was cut …

玉 城：こちらからここに転進するときには斥候で7名、こう、私は、泳ぐのは、まあ達人だったもんですから、もう指揮官から命じられて、もう、行ったんですよ。このタロキナの米軍の飛行場のすぐ近くまで行って、敵機に、もう今度部隊が移動してきたら、どこに出兵するとかそう、調査に行ったんですが、行って帰りしてるときには40メートルぐらいの川、広いところ、深いもんですから、その、3カ所は、川があったんです。そこをゴムの船で渡って、そうして行動していったんですが、ちょうど真ん中の川、コロゲという名前の川が、それをタロキナの基地からぼーんと打ち込まれてですな、そこへ自分たちが乗ったゴムをぶうとふっかけられて、ずっと、したら沈んでしまったもんですが、自分たちは鉄砲かついで背囊をかぶっとる。んで40メートルぐらいの川、もう深いんですよ、そこ泳いでいって、したら7名のその戦友が、1人も残らず・・・

大 西：死んでしまった。

玉 城：はい。帰ってきて、隊長にその報告をしたら、隊長は非常にほめてくれましたが、そんなこともありました。で、このタロキナ戦でも日本軍が引き揚げるようになったときにその川を渡るとき、もういつもたくさんの兵隊がですな、もう犠牲になってるね。それはタロキナの基地から時間的に大砲打ち込むんですよ。そんで、もう、川はちゃんと、測定されてるもんですから、もう全然失敗はないもんですから、敵は。もう日本軍は、そこでもう引き揚げするということで、たくさんの兵隊が犠牲になったんです。

大 西：So between Torokina and these places, there are three big rivers, he says, and it was very hard to cross. Each time he had to cross, because there was a boat but it was shot so it was useless, and lots of people died. He could somehow manage to cross, but it was very very hard.

タニス：He is a strong man.

大 西：Hmm, he is really a strong man.

タニス：And also a good man. Good people survive, so it must mean a good man.

大 西：強くていい人は生き残る。

タニス：That's what we believe in our society.

大 西：強くていい人は生き残る、っていうことわざがあるそうです（笑）。

タニス：And also a good man.

島 田：この人がまさにそうであったわけだ。

和解に向けて

玉 城：ああ、もう戦争は2度とせないようにな。

タニス：(玉城氏と抱き合っ) Tell him that I'm really happy - very happy to see him.

大 西：とてもうれしいです、幸せです。

タニス：I take him as my grandfather.

玉 城：(Y.E.氏に向かって) E！お兄さんの亡くなったところ、地名ははっきり分かっておる。今そこにみんな碑文が立っておる。

タニス：I want you to live many years more.

玉 城：そんな優しい。

大 西：どうか長く生きてください。私のおじいさんのように感じますということです。私のおじいさんです。

タニス：I want you to live many years, strong.

玉 城：もう、98歳ですからな。

島 田：あの、だいたいの生年月日どれぐらいか、先輩、ちょっと、教えて。

大 西：今ええと、タニスさんは、1965年生まれですから48か9歳なんです。最初に大統領になられたときは43歳です。また大統領になる可能性が非常に高いので。

M : ああそうですか。

大 西：こういうことがあつたらぜひその、日本との平和というか和解とかそういうことに尽力したいと思われてるので、いろいろ情報をいただいて、遺骨収集とかそういうことも含めて、ぜひ。

M : 遺骨収集でしたら、あの、向こうの方が。

Y : ありがとうございます。

タニス：(Y氏と抱き合つて) Thank you, thank you.

Y : (大西氏と握手して) とっても、遠路来ていただいてね、ありがとうございます。

大 西：本当にありがとうございました。本当にうれしいです。

宮 城：深福さん、もう一度握手してください。

(玉城、タニス、Y氏が肩を組み、記念撮影)

Y : こういう方々がね、気持ちを分かち合つていらっしゃるから、ありがたいよ。

タニス：I will work hard and find the way to return their spirits, and then do a proper reconciliation.

島 田：ありがとうございました。でもね、あの、大統領先生がとっても感激しているからよ、皆さんもね、おばあもね、あんた娘さん？

M : はいそうです。

島 田：ああ、よかったね。

M : よく父から話は聞いてるんですよ。ブーゲンビルの話はね。

大 西：ええ、ええ。

M : 戦争の話はね。ええ。

島 田：だから本当に・・・

M : 大変な、難儀した話をいつも聞かされて。

玉 城：4カ年おりましたんで。

玉 城：まだ若いですからもう一度大統領になって下さいよ。

(拍手)

大 西：You have to become a president again.

玉 城：いや、本当ですよ。まだ若いのに。

タニス：Maybe when you are still strong, I can take you to Bougainville to see Bougaville.

大 西：まだあの、深福さんがお元気なうちに大統領になって、ぜひブーゲンビルにお連れしたいとおっしゃっています。

M : ね、もうちょっと若かつたらねえ。お訪ねすることもできたでしょうけど。

タニス：Yes, in fact we need to work on it with I-san. On reconciliation at village level with the chief of Orami.

大 西：あの、今パプアニューギニアにいらっしゃる、JICAの事務所にIさんって方がいらっしゃるんですけど、その方は歴史が専門で、この戦争のことをずっと調べていらっしゃるんですね。それで、

タニスさんと非常に仲が良く、だからそういうことも通して、今回の話をあの、もう少し、その、今後の、いわゆる和解というんですかね、そういうことをちょっと進めたいと思っていらっしゃるので、それはもう大統領であるなしにかかわらず、それぐらいの力は彼は持っているのです、そういうことから具体的にぜひ始めて、いい関係をぜひ作りたいたいですね。

M : よろしくお願ひします。

大 西 : はい。

M : よかったね、おじいね。

玉 城 : ああ。

■ 考察

この対談を通して、我々のFSが目指していた異なる地域の住民の間での相互理解に、「歴史体験」の共有がいかにか重要であるかが、浮き彫りになった。深いレベルでの地域住民間の交流の端緒が、思いがけない形で開けることになった。

「生物文化多様性」というと抽象的だが、玉城さんの「サゴヤシ」を切ったことに対する深い後悔の念や、芭蕉布の技術伝播を通じての住民の交流などの話題を通して、玉城さん、タニスさんはじめ対談に参加した人びとすべてが、沖縄とブーゲンビルという地域を越えて、生物と文化の深い関係を直感的に把握しその共感を分かち合っている。この背景に、二つの地域に共通する自然との共存の深く長い歴史を感じる。

戦時中にブーゲンビルの人びとが日本人に対して持った親近感の背景には、ブーゲンビル戦参加者に、かなりの割合で沖縄出身者がいたということと関係があるかもしれない。

いずれにせよ、この対談を通して得られた芽を大切に育て、今後、両地域共同体の住民同士の交流を触媒としての新たな価値観の創出を実現していきたい。

